

# 古典経済学における理論的枠組みに基づいた地域研究の教材化

荒井眞一 勝谷友一 酒井義信

## 要旨

大谷大学社会学部地域社会学科における「教職自主ゼミナール」の取り組みを通して、授業実践において学問研究の成果を理論的な枠組みとして用いることの有効性について述べた。先回の実践において設定した『経済学批判』における理論的な枠組みを踏襲しつつ、今回の実践においては北海道十勝地域における牛乳生産にかかわる経済活動をとらえる実践のありようについて、学生とともに考察し、大学見学会に参加した高校生たちを対象に実践を行った。先回同様、『経済学批判』を枠組みとして採用したことにより、生産における一般性を踏まえた流通や消費のありようをとらえることにより、楽しい授業実践を達成することが可能となった。

キーワード：経済学批判、理論的枠組み、教職ゼミナール

## 1. 地域社会を把握するための理論的枠組みとその再現可能性

札幌大谷大学地域社会学科では、教員免許状取得を希望する学生に自主的な学びの場を提供するべく、「教職自主ゼミナール」を開設している。ゼミにおいてはオープンキャンパスや出前授業といった場において、学生(基本的には1年生)たちに対して年に数度の公開授業の舞台が提供されている。2012年から2014年度に行われた公開授業を表にまとめれば以下の表1のようになる<sup>1</sup>。

すべての実践に共通な点を挙げるならば、地域性を反映した課題設定がいずれも、経済的な内容を基礎としていることである。学科が設立されてから4年を経過するが、この点に変化は見られないようである。

昨年度行った「製糖業から見る十勝」実践においては、教員による指導の下、マルクスの『経済学批判』における記述を踏まえて、砂糖にかかわる生産・流通・消費を統一的に把握することを考察させた。このような試みの結果、授業づくりに際して学問研究成果を踏まえた理論的な枠組みを用いることの有効性が強く示唆された<sup>2</sup>。

昨年度と同様に、今年度授業づくりを行った学生たちも十勝における農業を取り上げたいとの意思を表明していた。十勝地域にはよつ葉乳業の基幹工場も存在しており、昨年度とら上げた製糖業とともに十勝地域における農業生産における一翼を担っている。今回の教材作成に際しては、多数の方々のお力をお借りした結果、上記基幹工場を直接見学させていただける機会をいただくことができた。

表1：教職履修学生による公開授業一覧(「O.C.」はオープンキャンパス)

年度	テーマ	舞台
2012	「カントリー・サインから読みとく北海道」	O.C.
	「貿易を通してTPPを学ぶ」	O.C.
	「タイムスリップ・イン・バブル」	O.C.
	「北海道の経済について考える ～余市とニシンから～」	O.C.
2013	「ジンギスカンと北海道」	O.C.
	「道の駅紀行 ― 道の駅から学ぶ地域性と特色 ―」	出前
	「札幌ラーメン不思議発見」	O.C.
2014	「製糖業から見る十勝」	O.C.
	「ものづくりのマチ室蘭 ～白鳥大橋～」	出前

上記の経緯を踏まえ、今年度実践においては、十勝地域における牛乳生産という視点から、農業生産にかかわる生産・流通・消費を統一的に把握することを考察させた。この考察のため、学生たちに対しては、昨年度と同様に、古典経済学のエッセンスともいえるマルクスの『経済学批判』から(筆者が吟味した)要点部分を材料として理論的な枠組み作りを試みさせた。以下、本論においては『経済学批判』の考察から学生が設定した理論的な枠組みに沿う形で、現地調査を踏まえた実例を示しつつ完成された実践のありようについて明らかにする。

1 2012年度オープンキャンパスにおける模擬授業(全4回)の概要は、『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ』第1号という小冊子(札幌大谷大学社会学部地域社会学科発行、2013、編集は筆者の手による)としてまとめられている。

2 実践における理論的枠組み及び実践の概要は、『経済学批判』の枠組みを基盤とした授業実践(荒井眞一、岡部敦、酒井義信、札幌大谷大学紀要45号、2015、pp.77-82)にまとめられている。

今回の授業実践に関しては、札幌市内の公立高校のご協力の下、本学への大学見学の間をお借りして授業実践を行わせていただいた。

## 2. 古典経済学の理論的枠組みに基づいた教育内容

2015年9月3日に行われた、札幌大谷大学サテライト教室における、大学見学に参加した高校生らを対象とした模擬授業に向けての話し合いの中で、学生らは、昨年度に続き帯広を中心とした十勝地域における農業の展開について具体的に学びたいとの意向を示していた。十勝地域における農業は多岐にわたるが、今年度の参加学生らは牛乳生産を中心とした酪農業に焦点を絞りたいとの意向を示した。その折幸運にも恵まれ音更町内にあるよつ葉乳業の十勝主管工場を見学させていただけることとなったので、学生らの意向を具体化してもらうこととした。

近年牛乳生産は進化を遂げており、よつ葉乳業では従来の製品に加えて、低脂肪牛乳や「特選」という名を冠した乳脂肪分の高い牛乳などを多種類生産しており、これらの多様な製品群は同時に多様な消費形態を生みだしている。十勝地域には六花亭や柳月といった全国的な知名度を有する企業の他に大小の菓子製造元が存在する。多くの洋菓子には生クリームや牛乳の使用が不可欠であるから、十勝地域への実地調査によって具体的な資料を集めることにより、牛乳の生産から消費までを一貫したものとしてとらえ理論的な内容として大学見学に参加していただく高校生らに提示することが可能ではないかとの見通しが立った。

上のような見通しをより確かなものにするため、前年度実践学生らによって考察された『経済学批判』の記述に基づいた理論的な枠組みについて今年度の学生らにも考察を行わせた。昨年度も依拠した生産一般に関する記述を引用すれば以下のようなものとなる<sup>3</sup>。

生産一般は1つの抽象ではあるが、しかし、それが共通なものを現実に明瞭にし、固定し、したがってわれわれのために反復の労をはぶいてくれるかぎりでは、1つの合理的な抽象である。

上の記述に従うならば、生産一般をとらえることによって社会における経済的な動きを合理的かつ抽象的にとらえることが可能となる。さらに『経済学批判』では、「合理的な抽象」とされた生産と流通及び消費との関係について、「流通は、それ自身、ただ交換の一定の契機でしかない」との記述とともに<sup>4</sup>、「生産は一般性であり、分配と交換は特殊性であり、消費は個別性であって、その中で全体が連結されている」と述べられている<sup>5</sup>。昨年度と同様にこれらの記述に従うならば、一般性を有する牛乳生産を起点として、十勝地域における特殊性を背景とした流通のありようや、個別のかつ多様な消費のありようが連結されたものとして導き出されるはずである。

『経済学批判』においてはさらに、生産、流通(分配、交換)、消費の関係について「生産、分配、交換、消費が同じだということではなくて、それらはすべて1つの総体の構成部分をなしており、1つの統一体のなかでの区別をなしているということである。」との記述がなされている<sup>6</sup>。この記述に従うならば、牛乳の生産、流通(分配、交換)、消費にかかわる内容を整理することにより、昨年度と同様に十勝地域における経済の展開の具体例を「1つの統一体」として述べるのが可能となるだろう。

## 3. 古典経済学の理論的枠組みに基づいた教材作成

以下、自主ゼミ学生により作成された「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライドを紹介しつつ、『経済学批判』記述より導かれた理論的な枠組みについて述べる。

3 「『経済学批判への』序説」、『経済学批判』マルクス著 杉本俊朗訳、大月書店、1953、p.271

4 前掲書3)p.291

5 前掲書3)p.277

6 前掲書3)p.292




### 十勝は生産量日本一位の作物がたくさんある

- ・ビート(天邪)の生産量(シェアほぼ100%)
- ・小麦の生産量
- ・大豆の生産量
- ・小豆の生産量
- ・いんげんの生産量
- ・青刈りトウモロコシの生産量(デントコーン)
- ・長いも生産量
- ・スイートコーン生産量
- ・ごぼう生産量
- ・チーズの生産量
- ・肉用牛産出額
- ・牛乳処理額
- ・馬鈴薯生産量

図1：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 01, 07

### なぜ十勝は農業や酪農が盛んなのか？

- ・十勝平野という広い土地(北海道の10%)
- ・平野の中に十勝川が流れている
- ・寒暖の差が激しい
- ・土地が火山灰を多く含んでいるため作物に適している
- ・しっかりとした技術伝達




### 十勝の牛乳

図2：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 08, 12

授業においてはまず、「十勝の生産物から経済学を考える」との授業名が示された後、十勝地域では数多くの農作物が生産され生活に浸透していることが述べられた。さらにそれら農作物の全体像を知る主要生産物として酪農業が指摘された。

上記説明の後、基本的な知識として、日本における牛乳生産の歴史や、「ホモジナイズ」と呼ばれる乳脂肪分子の均一化に関する説明とともに、学生による牧場直営牛乳の食レポ動画などが示された。

上記導入部の提示の後、昨年度と同様に、『経済学批判』における理論的な枠組みを踏まえた授業構成を行うことを、授業に参加した高校生らに提示した。この提示のすぐ後に、学生たちは『経済学批判』における「どんな生産も過去の積み重ねられた労働なしには不可能である」との部分の引用を踏まえて、十勝における牛乳生産における合理的な作業方法や機械化の具体的なありよう、さらには牛乳生産における酪農家同士による危機管理の在り方について写真資料や具体例を挙げつつ述べた<sup>7)</sup>。

7 前掲書3)p.271

今回は...マルクスの『経済学批判』とともに、  
牛乳を用いて  
『生産』・『流通』・『消費』の観点から考える。



カール・ハインリヒ・マルクス

プロイセン王国（現ドイツ）  
出身のイギリスを中心に活動した  
哲学者、思想家、経済学者、  
革命家。  
『経済学批判』(1859年)  
資本論（1巻1867年、2巻1885年、3巻1894年）

## 苦勞無くして得るもの無し

「どんな生産も過去の積み重ねられた  
労働なしには不可能である。」

(cf: 経済学批判 序説 P271)

図3：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 22, 23



## 一つ一つが勝負

・酪農家は年間2,200時間働いています。1日2回、搾乳し、搾った生乳は各農家のバルクタンクに貯蔵します。1日1回、または2日に1回、ミルクローリー車が各農家を巡回し、バルクタンクに貯まった生乳を集め、地元の乳業工場に納入します。

・もし、ある農家のバルクタンクの冷蔵装置が機械的トラブルで壊れ、生乳の温度が許容範囲をこえて上がったとしたら、無念なことではありますが、その生乳は廃棄しなければなりません。さらに問題になるのは、ミルクローリーに集乳された後で、問題が発覚した場合です。

例えば10戸の農家から集めた生乳が、全量廃棄となります。その場合は、生乳の品質管理で不手際があった農家（原因農家）が、残り9戸の農家（搭載農家）に対し、損害賠償をしなければなりません。

図4：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 24, 25

昨年度と同様に、続いて学生らが理論的枠組みとして採用したのは『経済学批判』における「生産的活動は、実現の出発点であり、したがってまたその優勢な契機であり、全過程がふたたびそこにはいっていく行為である」との部分である<sup>8</sup>。

上に述べた「全過程」を今回の授業テーマである牛乳生産に当てはめると、生産された生乳が流通を経て加工され牛乳として消費された後、さらに生産物としての牛乳が流通を経て加工されアイスクリームという形で消費された後、生産物としてのアイスクリームが流通を経て各家庭において消費されるという一連の経過に対応するものと考えられる。これら一連の理論的枠組みに関して学生たちは、以下のようなスライドを作成して授業を行った。

8 前掲書3)p.284

### 繰り返される生産

「生産的活動は、実現の出発点であり、したがってまたその優秀な契機であり、全過程が再びそこに入ってくる行為である。」

(cf: 経済学批判 序説 P284)

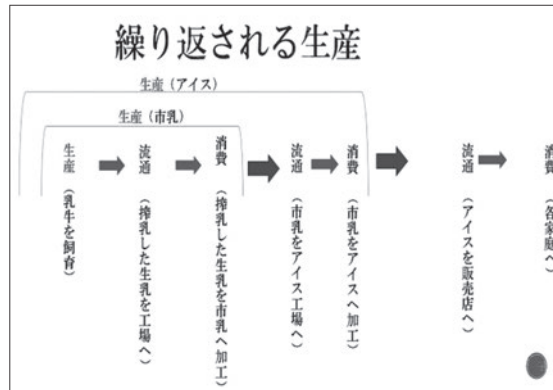


図5：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 26, 29

上に述べた理論的枠組みを授業として確実に理解を定着させるには、具体的な資料による補強が不可欠と思われる。それゆえ、昨年度と同様に、学生たちの実地調査の様態も含んだ、以下の図に代表されるスライドを授業において示した。

**昔** 1970年代以前

乳脂肪分3.28% (1966年)  
一頭あたりの生乳生産量 4,250kg/頭 (1965年)

**現在** 飼育技術の向上と乳牛の選抜改良に加え、エサの内容が変わった!

牧草(粗飼料) + 配合飼料(濃厚飼料)

乳脂肪分3.91% (1999年) 濃くなった!  
一頭あたりの生乳生産量 約8,088kg/頭 (2009年)

牛乳をみんなが飲んで牛乳消費量増加! → 牛が食べる飼料の輸入が必要!

### 最新の搾乳技術

- 搾乳ロボット
- 搾乳ユニット自動搬送装置
- ほ乳ロボット

図6：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 32, 34

上図のスライドを見てもらうことにより、生産の繰り返しに対応しうる品質の向上や、牛乳生産における技術の進歩の様子を示すことが可能となった。

『経済学批判』においては、流通は「特殊性」として、消費は「個別性」として現れると記されていた。十勝地域に

### 流通

毎日出荷出来るようになった牛乳。

例えは「釧路港」では、

北海道的で消費される14億の牛乳を首都圏等に輸送している。

北海道の牛乳・脱脂牛乳の増産が期待!



図7：学生作成授業「十勝の生産物から経済学を考える」における授業進行スライド 41, 42

における流通は専用の運搬船を使用した定期的かつ大量の輸送という「特殊性」として現れた。また、消費に関しては大小さまざまな菓子店や食品提供施設という「個別性」として現れた。

授業においてはまとめとして、「技術の向上や機械化のおかげで生産や流通の面で昔に比べ格段に進化している」「経済学を用いて物事を考えると、経済の仕組みや新たな社会の側面を知ることができる」という2点を指摘して授業の末とした。これら2点を指摘することにより、本授業における狙いを明確化した。

#### 4. 教材作成を踏まえた実践の成果と今後の課題

以上本稿では、昨年度と同様に『経済学批判』における理論的な枠組みを踏まえた授業づくりを行い、その理論的な枠組みに基づいた内容と方法の再現性について、実践の概要を述べつつ考察した。昨年度における「製糖業から見る十勝」実践では、指導教員による程よい援助によって、大学1年生や2年生に対して学問研究の成果を踏まえた授業づくりを行わせることが可能となるということが示唆された。この示唆を踏まえて、今年度実践においては、『経済学批判』における理論的な枠組みが他の実践においても適用可能であることが確認された。

今年度実践においては、授業の成否の詳細にかんして、参加した高校生たちからいくつかの感想をいただくことができた。大学訪問全体についての自由記述の一部であるので、今回の授業に関する感想は決して多くはない<sup>9</sup>。しかし、10名程度による下記の記述からは、参加した高校生たちが大学生による模擬授業実践に関して、非常に好意的な印象を持ってくれたことが示されている。

- ・大学生の模擬授業を受けて、ものすごく分かりやすい授業だなと思って聞き入ってしまいました。
- ・大学生の模擬授業は楽しかったし、ためになったので眠らずに頑張れました。
- ・模擬授業をしてくれた人もおもしろい授業をしていてとても楽しく、授業を聞くことができ、そしてとてもわかりやすく説明してくれたり問題をふってくれて楽しかったです。
- ・模擬授業を受けさせていただいて思ったことは、やはり、先生を目指しているだけあって、学生とは思えないほど授業がとても上手でまるで本当の先生のような感じでした。
- ・模擬授業では、詳しいことまで教えてくれたり、途中途中で問題を出題して、笑いを取ってくれたりとても楽しかったです。
- ・大学生さんの授業は農業の話で、とても分かりやすく関心が持てました。
- ・大谷大学の生徒に授業をしていただいて、すごいおもしろい授業で、みんな楽しかったと思います。
- ・大谷大学の生徒さんが授業をしてくれて、自分と5歳ぐらいしか変わらないのにこんなに立派な授業ができるんだと思い感心しました。
- ・大学生の模擬授業は毎日受けたいと思うくらいになる話でした。
- ・イケメンのお兄さん2人が授業をしてくれました。ききやすくておもしろかったです。

上記記述をみるに、「ものすごく分かりやすい」「とても分かりやすく関心が持てました」といった感想と「ためになった」「詳しいことまで教えてくれた」といった感想が混在している。わかりやすさが簡単さとはつながらず、詳しくに通じている。その結果として、「おもしろい授業をしていてとても楽しく」「すごいおもしろい授業で、みんな楽しかった」に見られるように楽しい授業が行われることが可能となり、「毎日受けたいと思うくらいになる」授業となったと思われる。今後課題とするべきことは、これら面白さの達成される経過を、授業の進行過程に即して検証していくことにある。

9 大学見学に参加したのは札幌市内の公立高校の1クラス、41名であるが、それらのうち感想文記述に模擬授業を取り上げてくれた高校生の数は10名であった。